

記録

ケルン日本文化会館 日本語教師研修会

「共に生きるためのことばの活動とは何か」

講師：細川英雄

2018年4月28日（土）ケルン日本文化会館

ディスカッション1のテーマ

前半で扱ったことばの教育（日本語教育分野における）の分類や目的、問題提起、それらを実現すべく考えた取り組みの例として 2003 年に行った授業の一例をビデオ動画で示した。

はじめに話した枠組みとビデオ動画との関係、そして、あなたのことばの教育実践についてどう考えますか。

グループ1の論点

- ・ 枠組みとビデオの関係については、スライド4の「行為者としての学習者の活動4点（自分の考えを表現する・他者の考えを聞く・自分の考えを更新する・複数の他者と自分、社会との関係について考える）」を押さえた活動をビデオ動画は示していた。
- ・ 文法項目を習うために活動を行っているという認識を学習者に持たせずに、結果として、文法項目や知識を身につけている。そればかりではなく、他者の考えを聞くという社会性も身につけているのではないか。
- ・ 作文のテーマが個々の参加者によって異なる活動で、その上で共通のテーマに関してディスカッションをしたり、プロジェクトにするようにしたりしてみたらどうかという話が出た。
- ・ 大学の授業で、一つのテーマについて討論をした後、作文を書く活動をしたことがある。テーマはビーガンやベジタリアンについてどう思うかというもので、個人の考えを出しやすく、深められそうなテーマだと思ったが、実際にはビデオ動画で出たような、どうしてそう思うか、などの一歩踏み込んだ質問は出ず、ビーガンはやりすぎだとか、肉はあまり食べないほうがいいのかなどの意見しか出ず、討論を通して深めることができなかった。要するに、聴く側の姿勢として、一歩踏み込んだ質問をすることや相手の話をしっかり聞くななどの期待した態度があまり見られなかった。ビデオ動画に見られたような、他者の考えを聞いて自分の意見を更新するところまで活動を持っていくことが、教室の役割であり教師の役割なのではないか。

グループ2の論点

- ・ 枠組みの話で、日本語は一つではなく、各々が持つ「文法」が存在する。その上で、正しさ/正解がないという前提に立った時、教師は言語的な正しさの規範を求めている学生に対して、伝わるからそれでも大丈夫だと言って何でも受け入れだけをしていくことには無理があるという話になった。全てを中間でもいいと伝えることには無理があり、考えることばの教育実践だけを理想として求めていくことは疑問が残る。
- ・ 個人的な経験談を話すと、ドイツ人の夫にドイツ語で書いた仕事の手紙のドイツ語の誤りを訂正してもらいたくて見せると、「かわいいー、すごい面白い、オッケーこれでいいよ。」

というので、直してくれと頼むと「これを直してしまうと、つまらないドイツ語になってしまう。お前の人間性が伝わらなくなる。これはお前のドイツ語で、他のドイツ語よりもっとすごいんだ」と言って褒めてくれる。だが、自分としては「正しいドイツ語」にして欲しいんだとさらに言えば、電気屋さんの書いた手紙を見せて「ここもここも、ドイツ人だってこんなに間違えているのだから、お前は間違えてもいいんだ。」と言われる。それが自分にとってはものすごいフラストレーションになる。学習者が話しているときに、間違いを指摘することはやってはいけないが、学習者が正しい日本語を学びたいから、教えて直して欲しいと言われた時は、教師はそれにきちんと対応しなければならないと思う。

グループ3の論点

- ・ そもそも、授業を成立させるために、ビデオ動画ではディスカッション形式で自分の話をするということで進めていたが、それを実現するために最も大切なことは学習者同士の信頼関係ではないかという話になった。信頼関係というのは、日本語の文法ではなく、相手の考え方について頭ごなしに違うと言って否定しないことであり、対等な関係を保つことが必要なのではないか。ただし、環境が異なれば様々な状況があり、それぞれの教える環境、学ぶ環境に応じたものを考えなければならない。
- ・ ビデオ動画の中で、自分の話をするばかりではなく、グループの構成員からの様々なフィードバックがあって自分の考え方が少し変化するという感想を述べていた参加者がいたが、考え方の変化というのは外部からの刺激がない限り生じないので、そこには必ず他者との交流が必要になる。そういう状況を設定できるのはディスカッション形式やビデオ動画で取り上げていたような授業なのではないか。中には自己の考えを揺るがされるのを好まない学習者もいるはずなので、その点についても考慮しないといけない。

グループ4の論点

- ・ ビデオ動画の中でインタビューを受けていた学生の1人が言っていたように、他人の意見を受けて自分の意見を構築し直すことと、「自分で作った文章」という発言がポイントになるという出発点から、興味があるテーマを扱うことが学習のモチベーションのために不可欠なのではないか。
- ・ 発見型学習。自分で文章を作ることによって、自分の考えが発見できたり、他者の意見を聞いて、他者の意見が発見できたり、その意見を受けて自分の意見の変化が発見できたりする、発見型学習というキーワードも出た。
- ・ そこから発展して、教授法乱立時代を経て個人が学習の方法を選ぶ時代になっているという話が先にあったが、学習方法やストラテジーを選べる学習者はすなわち、自律的学習者である。教室で何ができるかという問いに対しては、教室は自律的な学習への方向づけや支援をする場ではないのか。具体的には選ぶツールを提案したり、選べる学習者に育てる

場に変化してきているのではないか。

グループ5の論点

- ・ ビデオ動画で紹介していた活動には教師が出てこない。教師が1から10まで教えるのではないという環境がいいのかもしれないという話になった。実際に教師が一步身を引いて活動を見守る姿勢を実践している教師もいて、動画との共通性が見えた。
- ・ グループ内には母語話者（日本人学生）が参加しているが、その母語話者と非母語話者の間に力関係が生じてしまうのではないかという疑問があったのだが、意外に母語話者自身も様々な指摘を受けて考えを変えたり、分かりやすく説明したりということがあり、互いに理解しあうという歩み寄りの態度が見られ、そこから社会性が築かれていくのではないか。
- ・ グループは小さい意味での社会を形成し、コミュニケーションを通して互いを知り合い、影響しあいながら各々の個が発展していくというプロセスがグループの中で起こっているのではないかということビデオ動画を見て思った。

グループ6の論点

- ・ 自分の考えを表現する、自分を開く、自分ってなんだろう？という問いかけから話が始まった。例えば、日本語を話している自分と母語を話している自分とは違う自分である。そう考えうると、「自分」といった時にどの自分なのかがわからなくなる。アイデンティティクライシスの話までにも至った。無理やり関連付けるとすれば、先に個人の中に複数の言語があるという話があったので、そことリンクするののかも思えるが、一方では自分が中核にあっても、言語Aの自分、言語Bの自分、言語Cの自分に違いがあり、言語Bの自分はまだ本当の自分ではないという気持ちがある場合、あるいは自分でそのギャップを感じている場合、それを自分とは認めたくないという問題もある。自分がなんであるかきちんと定義できないところに、他者に自分がどう見られているかといっても、もっとわからなくなる。
- ・ ビデオ動画の中で、自分の言ったことにフィードバックをもらうことによって再構築できて、そこが面白いという意見があったが、自分の母語ではないことばで話す場合には、発話した時点で既に再構築されている。例えば、自分の母語で言わないような言い方で言ったりすることなどが一例である。

〈細川先生のまとめ〉

体験的に自分が考えていることについて。

- ・ なぜ、自分の興味関心についてテーマを立てて語るという活動の方向性を設定しているか
たとえば、人は自分に関わっていないことについては関係のない外側のこととして通過し

てしまう傾向がある。そこで関係性を見出してやりとりをする場合に、「あなたはどうか」というところが落としどころになると考えている。わたしの場合は、一人一人が自分の興味関心に基づくテーマを出すということを基本的に活動の原則にしている。そうすると、一人一人がバラバラのテーマになり、收拾がつかなくなるのではという質問をよくもらうが、表面的に繋げようとするとは繋がらないが、時間をかけて真剣に向き合って議論をしていくと、その向こう側にもうひとつ大きなテーマが十中八九でてくる。例えば、自由とは何か、愛とは何か、生きるとは何か、死ぬとは何か、人生とは、人間は何のために生きているのか、といったある意味では哲学的でもあり、一般的でもあるかなり大きなテーマだ。これが誰もが共通するところへ繋がっていく。何となく共通点があるなという意識を一人一人が持ち始めると、活動が急速に活性化する。ただし、メンバーの力能が反映し、様々な条件に左右されるので、どうすればそうなるかとは言えない。目指そうとすれば、逆効果であったりもする。そこには、信頼関係や対等な関係性、「何を話しても大丈夫だ」という安心感が必要なのだろう。力関係が存在すると成り立たないので、最大限取り払うことにしている。

- 文法を直さないということに関しては、結論的には、正しいという規範・基準がどこにあるのかということに尽きる。誤用を訂正するかしないかという話になってしまいがちだが、ポイントはそこではない。学習者自身が自らの中に自分の基準をつくれるかという課題である。そうした意識を持たない人に、「先生に全てお任せするから直してください」と言われても、どこを直せというのだろうか。それよりも、あなたの言いたいことは何なのか、というインターアクションを繰り返し行い、本人の意図をメンバー全員が納得するところまでつづける。できれば、このやりとりを教師と学習者の関係だけではなく、学習者間でやってほしい。何が言いたいかを質問し合うことにより、各々の言いたいことが相手に伝わるようになり、相互に了解できる。あなたが言おうとしていることがわかる、と全メンバーが了解すれば、それ自体、他者承認の活動になる。それがおそらく社会性に結びついていくのではないか。
- 学習者の要求、すなわち自分は正しい日本語がわからないからとにかく間違いを訂正してほしいという願望をそのまま全面的に受け入れるのは、学習者ニーズを商品化した教育の消費だろう。かつての高度成長時代はそれでよかったかもしれないが、もはやそのような対応では、根本的な解決にならない。同時に、誤用を訂正しないということは、伝わるからそれで大丈夫として何でも受け入れることでは決してない。中間、つまり完璧に達成できないという意味では、母語話者であろうと第二言語話者であろうと基本は同じである。すべて完全な人間は存在しない。だからこそ、「あなたの言いたいことは何？」という問いが必要なのである。
- 教室活動は 10 人の教師がいれば 10 通りの方法があり、どれが一番いいということは決してない。いわゆる活動型も理想というわけでは決してない。世界で一番すばらしい理想

的な教授法が存在しないのもその理由による。教育実践とは、担当者が構想や企画を毎回の活動で試行錯誤しながら実施していくものである。むしろ、もっとも大事なのがそういうことが自由にできる環境をどうつくるかということであろう。例えば、学校の現場のシステム、大学という組織全体の中でそれぞれの実践をどう位置付けていくかという議論が必要だと思う。「教室」をどうするのかということも重要ではあるが、むしろ、私たちが闘わなければならないのは、それを取り囲む様々な状況からもっと自由になって、自分のやりたいことをやれるような実践空間をつくることだろう。それに気づかず、あるいは見ないようにして、現行制度のもとでの決まりだからと無自覚にしたがうこと自体が、実はことばの教師の地位を低めているし、発言力をも低めることになる。これは自分で自分を縛ることである。重要なことは、国家的な規模でも、各大学規模でも、学校間を結ぶ規模でも言えることである。組織自体がどのような教育を目指しているかということと、そこに、どのようにコミットしていけるかということ、これが一番大きな問題である。その上で、自分が一番やりたいことができる空間=居場所をどうつくるかということ、そして、そこで何をするか、である。組織、居場所、中身、この3つを充実させなければ何も始まらない。そのためには教師は連帯し協働して、真に自由で対等な空間を生み出していかなければならないと考える。

ディスカッション2のテーマ

- ・あなたにとって、多様な人たちが共に生きる社会における「教室」とは何でしょうか。
- ・「教室」という場はどのような役割を持ち、その「教室」で私たち教師は何を实践すべきなのでしょうか。

グループ1の論点

- ・授業を振り返りながら、制度や枠を疑問に持つ。再考する。
- ・枠自体を変えるのは難しいが、その目標がなぜあるか考える。

グループ2の論点

- ・武道の道場は初級でも有段者でもみんな一緒に稽古をする。それは言語の教室でも同じ。
- ・グループパズル(?)などを使い、生徒同士教え、教わるような場所を提供することが教室の役割ではないか。

グループ3の論点

- ・教室は何らかの場を提供するもの。場=それぞれ目的があり、そこでそれぞれが対話や交流するところ。

- ・ 目的に合った場を提供するのが教師の役割

グループ4の論点

- ・ 〈全体を通して考えた意見〉
- ・ 全体的な話のまとめとしては、賛同するが、言語は目的ではなく結果であるというところには少し引っかかる
- ・ 教室は教師が積極的に働きかける場ではない。
学生がその必要性を感じていなければ染み込まない。
- ・ 教師は「与える」という意識をできるだけ持たず、学生同士で話す活動がよいのでは。
- ・ カリキュラムを守らない勇気も

グループ5の論点

- ・ 教室は準備ではなく、その場自体がコミュニケーションである。
- ・ 教室はサロンである。人々が集まって個々人のことを話す場である。
- ・ しかし、教室のサロン化はいやだ。そこでは切磋琢磨、考え抜く場がないから。

〈細川先生のまとめ〉

教師が一方向的に教えるものではなく、活動を横で支えるという考え方は多い。教師はファシリテーター（自分の意見は出さない）が理想という考え方もあるが、むしろジェネレーター（作り上げていく/生成する）という関わりはどうかと考えている。たとえば、自分の意見もどんどん言う。学習者にぶつけて、議論を起こし、新しいものをつくりあげていく。それも教師の役割ではないかと最近を考えている。

今回はあたらめて「教室とは何か」について考えてみようということでした。

一人一人が自らの状況・環境を振り返って、もしかしたら起こるかもしれない革命も期待しつつ、日々の実践に励んでいただければ幸いです。

以上